「新潟応用地質研究会の思い出」

須　田　光　治*

新潟に応用地質に関する研究会を作ろう、と私に話を持ち込んできたのは、当時県の企業局にいた中山さん（現キタック社長）でした。昭和37年１月末頃ではなかったかと思います。

当時私は、県の企業振興課で地下資源開発の仕事をしていたのですが、私の頭には地下資源開発こそ、応用地質部門の最たる仕事ではないか、としか認識していなかったせいか、一瞬何を余計なことをと言う感じが、いささか脳裏をかすめたことを覚えております。

このことについては、中山さんと話をしているうちに、時代背景に関する認識のずれに気付くのに、そう多くの時間はいりませんでした。中山さんは大学を卒業してから、一時中央に出てこの種の仕事をしていたので、私などとは違う感覚を身につけていたのでしょう。

最も良く考えてみれば、同じ課の中にも早川さん（後興和の専務）がいて、当時まだ全国的な統一規格もなかったN値の測定などを試みていたのに、興味を示さなかった自身を反省したものです。

その後、中山さんと２人で研究会に関する素案作りをし、大学・県庁関係者を廻ることになるのですが、その前後の話や経過については、本誌第35号の巻頭で中山さんが詳しく述べております。従って私は割愛しますが、曲りなりにも研究会が発足し、会誌も発行できるようになった当初、即ち主として第10号発行頃までの思い出について、書いてみたいと思います。

第１号の発行は、昭和37年５月25日でした。設立総会、第１回例会は３月10日の土曜日でしたので、会誌の発行までには、２カ月程かかったことになりますが、この間にも色々なことがありました。

まず事務局を当時私や米沢さん（現土木部参事）がいたこともあって、企業振興課に置くことになりました。しかし、その後研究会あてに電話や郵便物がちらほら入るようになったことから、庶務係に知られることになり、よく詰問されました。その言分は私的集りの事務局を無断で庁内に置くのは、規則違反だと言うのです。

当時の私にしてみれば、志を同じくする者が集い、知識を研くことは、結果的に役所のためにもなろうと言うもの。それをマージャンや釣りクラブの事務局を勝手に庁内に持ち込み、部外者と遊びの相談をしているのと大差はないと言うのである。まだ年端も行かない私に、そんな理屈が判るはずがありません。事あるごとに言い返し、やり込められたものです。

しかし、今日この年になって当時のことを考えてみれば、庶務係のUさんの注意には、いちいちごもっともな点が多く、赤面のいたりです。当時、先輩は人目もはばからぬ新米の態度に、それとなく職場の節度、公私の別を教えてくれたものであり、感謝こそすれ、文句を言う筋合いのものではなかったのです。

その後Uさんは、要職を務めあげ退職しましたが、現在も健在でご交誼を頂いております。その後のご指導も含め、私に役人のあり方を厳しく、そして具体的に教えてくれた最初の先輩であり、今は大変尊敬しております。

さて話をもどしますが、次に会誌発行のための経費の捻出は大きな問題でした。

＊ 財団法人　産業地質科学研究所事務局長、評議員

発足当初、会員数は43名、年会費300円でしたが、これで年2回以上の会誌を出そうと張り切っていましたから、やりくりが大変なことは言うまでもありません。たかが5,000円にも満たない印刷物を、Nプリント社とSプリント社をこっそり呼び競争させたものです。

印刷費の捻出では、この他会誌に企業広告を載せることを提案し、第2号から早速実現しました。最初に協力を頂いたのは、日さくさんと興和さんでしたが、何せ部数100部の会誌ですから、さぞかし迷惑な話だったと思います。

また第1、2号を発行したあと、しばらくすると僅かではあったが、会員外から会誌入手の希望があり、皆んなを喜ばせたものです。早速第3、4号から1部100円、昭和38年3月に発行した第5号からは150円と決め、会誌の末尾で周知を図ったものです。今考えてみると、滑けいを通り越し、むしろ悲しい話ではないでしょうか。

お金の話ばかり続き誠に申し分けありませんが、もう少しお願いします。

第5号からは広告主も4社に増え、会員も52名となり、次号からは少しやり易すくなるのではと思ったのも束の間、今度は会誌の印刷が粗末で、このままでは文献とは言えない。次回からは活版か悪くともオフセット印刷にしなければ、せっかくの投稿者に失礼だと言うのです。

誠にご最もなご意見で返す言葉もありませんでしたが、私にしてみれば、到底賛成できるような話ではなかったので、聞き流しにしていました。しかし、運営委員会の多数意見として、見積ぐらいは取ってみろと言うことになり、しぶしぶ印刷屋と相談する羽目になりましたが、案の定当時の予算でできる額ではなく、意のある仲間を失望させたものです。

昭和39年6月（地震直前）には、9号を発行することができましたが、この時以降事務局は、新潟大学の地鉱教室にお願いすることになりました。従って、庶務係に気がねすることはなくなりましたが、同時に私の手伝いも少しずつ遠のいて行ったように記憶しております。

次に会誌発行のための経費と同じ位、心配したものに例会参加者の人数の確保がありました。

やはり折角開催するからには、盛会裡のうちに終らせなければと言う意地も働きましたし、その第1の条件は参加者を増やすことだと単純に割り切っていましたので、関係企業には半ば強制的に協力をお願いしたことを良く覚えております。

とかくこの種の集りには、高い理想・高度な目標を掲げ、はなばなしく旗上げはしたものの、何時の間には消えていたと言う話は、良く耳にすることです。

私はこの研究会だけはそうはさせたくないとの思いから、過度期の一手段として数や継続性にこだわり続けたつもりです。

今30年前を振り返ってみるとき、中味の良し悪しに心残りはあります。しかし、当時自分に出来ることは、それしかないと割り切っていたせいか、自分なりにやれることはやったように思っています。

研究会はその後、紆余曲折はあったが、あとを引き継いだ関係者のご努力で今年は30周年を迎えることができました。そして今では、規模・質とも発足当初の目標を上まわるまでに発展し、設立時の期待によく答えていると思います。誠に有難いことであり、心から感謝を申し上げたいと思います。